「６ヶ月間のインターンシップの現状と問題点」

The Present Situation and Problems of the Six-Month Long-Term Internship

聖徳大学　島田　薫

はじめに

インターンシップという言葉が日本の教育界だけでなく産業界にも浸透する時代がやってきた。現在の日本のインターンシップは米国の大学生が就職活動のひとつとして行っている社会体験が原型といえる。しかし、大学生のインターンシップはあっという間に広がりをみせた。その背景には日本の社会構造の急激な変化と深く関わっている。日本の社会変革に情報技術の進歩が伴い産業界はいわゆる日本型経営といわれるシステムが崩壊して、終身雇用制や年功序列を掲げない企業が増えてきた。有名大学を卒業し、有名企業に入社すれば企業が社員を定年まで家族同様に大事にしてくれた時代は過去のものとなった。企業が淘汰される時代となり、生き残りを賭けた企業はリストラクチュアリング（restructuring）を行わざるをえなくなり、その一環として人件費の削減のために雇用を二本立てにした。それは賃金の高い正社員を極力少なくし、安い賃金の時間給で支払う非正社員を増やす方式を採用した。非正社員はいわゆるアルバイト（派遣社員・契約社員を含む）のことで、日本全国でフリーターと呼ばれる労働者が 217 万人（労働経済白書　2004 年）と派遣社員という労働者が 174 万人におよび、年々増加している。

企業が新卒者を正社員として採用し、長期雇用を前提とした訓練を行い、育成するという従来型のスタイルは学校と企業とが直結した社会の仕組みであった。企業は時間とお金が掛かる新人教育をせず、即戦力として雇用できる人材を正社員として採用するようになった。社会の変革は大学教育にも大きな影響をもたらしたが、それに拍車をかけたのが少子化の進行であった。少子化社会は教育関連ビジネスの淘汰の始まりでもある。大学も企業同様に生き残りをかけ、いかに入学した学生に付加価値をつけられるかという時代になった。顧客としての学生にとっての大学選択の基準は卒業後の就職にかかっている。

学生は従来の大学教育だけでは就職試験という難関を突破できないこと気付いたが、大学側も同様であった。このような時代のニーズをうけ、インターンシップは広がりをみせてきた。文部科学省がインターンシップの推進（1997 年）を打ち出し、助成金が交付されることになり、全国の大学が取り組むようになってきた。

聖徳大学のインターンシップは現代ビジネス学科が発足した 2000 年 4 月よりスタートした。６ヶ月という長期にわたり、また必修科目ということで注目を集めたが、その結果として高い就職率が証明された。学生がインターンシップの経験により、働く意義や社会の本質を理解できたことが大きな要因となり、就職活動を上手く展開した結果といえる。いずれにしても年間３万人以上の大学生がインターンシップを経験する時代となり、特色あるインターンシップが広がる為にも聖徳大学の現代ビジネス学科のインターンシップを検証し、今後の問題点を考察するものである。

１　現状の説明

1-1　目的

聖徳大学現代ビジネス学科のインターンシップ（企業実習）は大学の３年次の前期（４月～９月）の半年間という長期間に渡って行われる。学科の必修科目となっているのでインターンシップに行かない場合は卒業ができない。また、受け入れ側の企業は即戦力として働ける人材を要求するので、２年後期よりビジネスの現場で必要な事前勉強が必要となる。勉強はインターンシップに行ってから学ぶのではなく、第一段階の目的として大学で学んだ多くのことを実務に結びつけ実務能力を身につける。また、社会人として必要なマナーや社会常識、日本語表現力やパソコンのスキルを習得することが重要となる。また、第二段階はインターンシップに行き企業・団体・官庁などの仕組みや仕事の流れ、職場の環境を体験する。またそこで学んだことを復習するため毎月隔週１回、大学で教員と問題点を話し合うことによって経験をより確実なものとしてゆく。第三段階としてインターンシップ終了後は実体験を通して自分自身の職業の適性や将来の設計を考える。就職活動はそれらの総合的な結果であるが、社会がどのような人間を評価し、仕事の現場がどのようなことで動いているかが認識できていることで、企業の選択や就職試験への対応に迷うことがない。インターンシップの大きな目的は学生が働くことの意義や厳しさを認識し、長い人生を生きて行くための基本的な知識や良質なコミュニケーションの方法を大学の教員と働く現場の方々から学ぶことといえよう。

1-2　内容

(1)　概要

正式名称は聖徳大学人文学部現代ビジネス学科インターンシップとなっている。また、聖徳大学は女子大で、実習に行く学生は全員女性である。期間は３年次前期（４月～９月）の６ヶ月間とする。学科必修科目となっているので全員が履修する。必修の６ヶ月というインターンシップは全国の大学では初めてとなった。夏休みなどを利用したインターンシップはかなり見られるが、企業側にとって短期のインターンシップ生の受け入れはかえって負担となり、敬遠されている。しかし、即戦力で６ヶ月間働く学生は企業にとっても貴重な存在となっている。また、インターンシップの特徴である無報酬で働くということが企業側にとって魅力といえよう。勤務体系は社員とまったく同じで一般的には午前９時から午後５時で土日、祭日が休日となっている。

(2)　受け入れ先

インターンシップ受け入れ先の開拓は大学側や教員の紹介によって決定する。現在、東京を中心に関東圏の企業・団体・官公庁など 40~50 社が登録されている。　学生は希望の会社を選択するが、各社 1~2 名の学生が配属される。

他の大学では数年前に、インターンシップ先の紹介をNPOや専門のビジネスとしていたところに委託していたが、最近は大学生が個人的に活動して開拓するケースや企業側が呼びかけるなど活発な動きが見られる。

企業と大学の間では申請書や契約書の取り交わしが必要となる。また、学生に守秘義務や就業規則の遵守を徹底することも大事である。大学の授業ということで大学側が準備した災害補償の保険に学生が全員加入するが、今後インターンシップが全国的に大きく展開する場合はこのような保険に個人で加入することも必要となろう。６ヶ月間という長いインターンシップは大学と受け入れ先とがコミュニケーションをとることも大事で、インターンシップ中の監督者として受け入れ先に指導員を配置してもらい、大学には事務局の専門の窓口と担当者を置く。企業との交渉は担当者と教員が対応するが、担当教員は企業の指定した日に訪問し、指導員から直接勤務状況を聞き、報告書を作成して学科の教員全員にメールで公開し、学科全体で学生の状況を把握する。

（3）事前指導

インターンシップが成功するかどうかは事前指導にかかっているといっても過言ではない。学生は社会経験といえばアルバイトぐらいしかなく、細部に渡るまで教える必要がある。まず、受け入れ先やその業界について予備知識を習得する。これは就職活動の時も同様な準備作業が必要といえるが、学生の受け入れ先が異なるので各自で情報収集の作業をする。また、ビジネスマナーを徹底的に習得することが必要となる。しかし、ビジネスとなっているが、内容は社会人として必要な基本的な常識といえよう。かつて産業界が右肩上がりで繁栄しているときは、世間知らずの大学を出たばかり新入社員に新人研修として、給料を支払いながら専用の企業の研修センターを利用し、泊まり込みで長期に渡り教育を施していた。そのような時代は終焉したが、学生は社会に巣立つ前に、どこかで社会人としての基本を学ばなければならなくなった。日本のビジネス社会は欧米のビジネス社会からみるとかなり特殊なルールやマナーが存在し、それがあることによってビジネスが円滑に回っていることは否めない。企業活動がチームプレイであり、横の関係である多くの仲間からのコンセンサスを得られても、日本はビジネスだけでなく縦の人間関係に複雑な系列があり。上司との関係を円滑にするには適切な日本語表現力の向上は不可欠といえる。敬語が話せなかったら社会人として生きて行かれないと知るのも学んだ結果といえる。また、情報技術の急速な進歩はどのような職場であってもパソコンを操作出来ることが前提となった。パソコンの能力は数年前までは大学の入学時までにパソコンを触ったことも無かった学生がいるほど、高校の情報教育に格差があったが、今日では大学入学時にほとんどの学生が操作出来るようになってきた。パソコンの習得は読み・書き・そろばんにあたる「書く」と「そろばん」であり、計算力も同時に必要とされ、パソコン能力のスキルアップも同時に進行させる。

インターンシップについて未経験な学生にとって前年度のインターンシップの経験者か

らの体験談や報告を聞くことは事前勉強やインターンシップの目的を明確化するうえで重要なことで、インターンシップを経験した学生はここでは立派な指導員となっている。

(3)　インターンシップ中の対応

受け入れ先の企業は 1~2 名の学生の為に研修プログラムを組むケースは希で、ほとんどの企業は初日から社員と同じ勤務をすることになる。また、企業側も聖徳大学のインターンシップ生の受け入れを経験している場合が多く、学生の能力を把握しているので問題はない。インターンシップ生は社員のタイムレコーダーに代わり、大学作成の出勤簿に企業の指導員が毎日、押印し、１ヶ月ごとに大学に提出している。欠勤は当日の急なものも含め企業と大学の双方に事前連絡することになっている。勤務状況は毎日、日誌を書き、企業側の指導員のコメントと共に毎週、大学の事務局と担当教員に提出する。この毎週提出される報告書は学生がどのような状況で働いているかを詳細に知ることができる貴重な資料といえる。担当教員は学生のゼミ担当教員があたり、隔週に登校日として、教員に報告に来ることになっている。その時に問題点やトラブルについて教員と共に話し合い指導をうけ、いわば現場での学習の復習の機会となっている。また、企業側に教員が隔月に巡回訪問し、指導員から状況を聞き、報告書を作成する。ゼミの担当教員と企業訪問する教員が異なるため、報告書は教員全員にメールで送られ、学生の状況を知ることができるようになっている。また、学生がトラブルを起こした場合は事務局の担当者が迅速に対応しているが、大きな問題は起きていない。

(4)　インターンシップ終了後

インターンシップは大学の必修科目の授業となっているために成績評価が必要となる。評価はインターンシップ受け入れ企業の指導員からの評価とゼミ担当の教員の評価との総合評価となる。勿論、出勤日数の不足や評価によっては再履修もある。

また、次年度のインターンシップに向けて学生からインターンシップに関するアンケートをとり、集計し、結果について検討することが重要な作業となっている。

２　検証

2-1　インターンシップ意識調査

学科発足時に入学した学生のインターンシップの体験を通し、意識調査の結果を集計した。調査の結果は問題点を鮮明にしているが、今後の対策に役立つものといえる。また、学生の６ヶ月間の変化は興味深いものがある。以下は集計した結果である。

インターンシップに関する意識調査の結果（2003 年度）

調査対象　現代ビジネス学科　３年生４７名

評価方法　履修前と履修後を比較し、各自の重要度を５段階評価した結果の平均値

非常に重要～５，大して重要ではない～１

調査日　　2004 年　４月１５日

学科内の授業科目

授業科目　「インターンシップＩ」	履修前	履修後
①　自分にとってインターンシップ制度の大切さ	3.5	4.7

大学での授業全般

①　大学での勉強の大切さ	3.5	4.4

授業科目「マナー」

①　マナーの大切さ、もっと学んでおけば良かった	3.7	4.4
②　挨拶の重要さ	4.4	4.8
③　電話で正しく応対する	3.7	5.0
④　正しい敬語を使う	4.2	4.8
⑤　時間厳守	4.2	4.6
⑥　責任ある行動	3.8	4.8
⑦　人間関係（来客や社内の人に適切に対応する）	4.1	4.6

授業科目「パソコン」

①　パソコンの大切さ、もっと学んでおけば良かった	3.7	4.2
②　キーボードを見ないで入力すること	3.9	4.3
③　ワードを用いた文書作成	3.8	4.2
④　エクセルでの表計算、関数など	3.8	4.3
⑤　ファイル処理	3.6	4.2

授業科目「英語」

①　英語の大切さ、もっと学んでおけば良かった	3.3	3.5
②　英語での電話や応対	3.3	3.0
③　ビジネスで使われる単語	3.2	3.0
④　英語の重要性	3.2	3.0

授業科目「社会常識」

①　社会常識の大切さ、もっと学んでおけば良かった	3.6	4.4
②　毎日、新聞に目を通すこと	3.3	4.2
③　日本語の知識	3.8	4.4

④	発表力	3.8	4.6
⑤	ビジネス文書の作成	3.6	4.2
⑥	簿記の知識	3.0	3.1
⑦	数学（算数）計算能力、金銭感覚	3.1	3.7
⑧	日本経済の流れや株価など	3.3	4.4
⑨	会社の組織や経営	3.4	4.4
⑩	法律	3.1	3.5

その他（インターンシップ中に自然に自分で学んだこと）

①	他の人と協調して働く大変さ	3.8	4.8
②	就職することがいかに大変か分かった	4.0	4.9

インターンシップを経験した良い点

① 大学生という生き方が無責任だと気付いた
② 正社員になるのがいかに大変か分かった
③ 社会と自分の関係を認識した
④ 企業が望む人間像を知った
⑤ 人に配慮し、思いやることができるようになった
⑥ 就職に対して真剣になった
⑦ 周りの人と協調することの重要性を知った
⑧ 自分の常識の無さを知った
⑨ 社会に厳しさを知った
⑩ 事前指導とインターンシップで即戦力になったと分かった
⑪ アルバイトと正社員の違いが明確に分かった

2-1　結果の考察

授業科目「インターンシップⅠ」

① 企業の新人研修のような授業をしたお陰で、即戦力として働けたことはこの授業の大切さを知ることになった。

大学での授業全般

① 大学での授業が卒業する前にどんなに大事か認識できた。

授業科目「マナー」

① 女性としてマナーは知っているつもりであったが、深いことに気が付いた。

②　挨拶の重要性を再認識したようで社会を動かしているのは意外にも挨拶であった。
③　ほとんど友人としか電話をしたことがない学生にとって電話の応対の難しさを知った。
④　「敬語」が話せないと日本のビジネス社会だけでなく社会で生きてゆかれない。
⑤　社会人には遅刻は許されないと知り、学生が甘やかされている現実を知る。
⑥　学生のアルバイトとの働き方の大きな差を知ることになる。
⑦　来客や社内の人は全て目上にあたり、対応で苦労している。

授業科目「パソコン」
①　パソコンの使用頻度が増していることを裏付けている。
②　パソコンでの仕事量が多いので６ヶ月で上達したと思われる。
③　ワードをなんとか使える状態になった。
④　関数入力などが増えて、苦労しているようである。
⑤　ファイル処理を任される機会が増え、パソコン操作の重要性を認識した。

授業科目「英語」
①　インターンシップ先にもよるが、あまり必要と感じられない。
②　ほとんど外国人の来客や電話がないようである。
③　改めて日本の社会は英語より敬語がいかに必要か認識する。
④　日本の英語教育について考えさせられる結果といえよう。

授業科目「社会常識」
①　社会常識がいかにないか知る場面が多くあったと思われる。
②　新聞を毎日読む習慣がなかったことが分かる。
③　恥をかいている様子がうかがえる。
④　相手を説得する能力は就職試験で問われる能力のひとつで、重要性を認識した。
⑤　パソコンは道具で内容であるビジネス文書の知識がないと作成出来ないと分かった。
⑥　インターンシップ先によるが、ほとんど簿記の知識は必要としない。
⑦　算数程度のことでも苦労しているようである。
⑧　どの社会にいても経済知識がなくては生きて行かれないと知った。
⑨　組織については研修先でそれぞれ異なるが、基本についても知ることが必要と感じた。
⑩　法的な観点を持って働くことを知った。

その他（インターンシップ中に自然に学んだこと）
①　職場が人間関係で成立していることに改めて知り、苦労をしたようである。
②　顕著に増加した数字で、就職という問題を企業の内側から見た結果といえよう。

３　問題点

3-1　企業側との関係

① 多くの企業でインターンシップ生が実習することになるが、企業によって学生への対応にばらつきがある。酷い労働環境で働いていた学生もいたが、企業側のインターンシップに対する理解がされていないことを証明していた。比較的インターンシップの受け入れ経験がないところほど丁寧な対応となっていて、企業側も試行錯誤といえる。また、学生同士が報告し合うので環境の良くない状況の企業は次年度に影響がある。

② 地方出身の学生は実家からのインターンシップとなっているが、地方都市でのインターンシップの受け入れ企業を探すことがかなり困難となっている。就職事態も難しいが、地方の産業が衰退している中でインターンシップを理解し、協力する企業は少ない。

③ インターンシップ受け入れに関して企業側での受け入れを承諾した担当者が管理職の場合は転勤や異動でいなくなることが多い。その為にまた初めからやり直し、社内で稟議し、受け入れを承諾してもらわなくてはならない。特に毎年、インターンシップに行く学生がいない場合は関係が途絶えてしまう。しかし、経営者が知り合いの場合、問題はまったくない。

3-2　学生との関係

① インターンシップ先の企業選択はやはり人気があるところほど競争率が高くなる。大学側も選択基準を成績や資格としているが、学生同士で調整しているときにトラブルがおきている。また、通勤距離の問題が大きく、こちらも選択の際に調整が必要となっている。

② 学生は６ヶ月間大学で授業はないが、その間に授業料を支払っているので授業料についての明確な説明が必要となる。これは入学時に父兄にきちんと説明しておかないと問題が起きやすい。

③ 半年間ほとんどアルバイトは不可能となるのでぎりぎりの経済状態の学生や奨学金に頼っている学生にとって経済的に苦しくなる。交通費と昼食代など、持ち出しとなるので半年間のお金のことは計画的にするよう指導する。

④ 企業で問題を起こす学生は必ずいるが、そのような学生は大学でも問題を起こしている。学生は大学を代表する立場であるという認識を持たせることが必要となる。

3-3　教員との関係

① 教員による企業訪問に問題が起きやすい。教員は社会体験が少なく、社会常識を学ぶ機会がないので、企業との対応についてマナーを学ぶ必要がある。また、企業に行って肝心の学生についての情報を得るのではなく自己宣伝をしてしまうケースや、立ち話で数分の訪問で終えたり、問題は多い。

② インターンシップ受け入れ企業は大学側と教員とで準備するが、企業を紹介できる教員が少なく、受け入れ先企業が減少する傾向にある。学生の通勤範囲が限られるために都心の大企業でなくともある程度の企業を用意する必要がある。今後の問題といえる。

おわりに

教育現場では実習というと教員免許の為の実習などがあるが、長期間にわたる企業での実習を大学が計画するという事例がなかった。聖徳大学のインターンシップは企業から来た教員や職員がチームを組んで準備段階から綿密なプログラムを作成したことが成功の要因といえよう。企業の就職試験を受けたことがない大学の教員だけでは計画自体が無理であったといえる。産業社会だけでなく日本の社会構造が大きく変わり、大学も象牙の塔と呼ばれる研究を中心とした組織の時代ではなくなった。教員は入学してきた大学生に４年間で付加価値をつけて社会に出すという大きな役目を担っていることを忘れてはならない。

また、教員はリストラのない社会で安穏と過ごしていたが、少子化は大学の淘汰という大きな波が来ることを予告している。しかし、この現状は新しい大学のあり方を示す良い機会となった。大学の教育という重要な目的を達成させるために企業と手を組んで進めてゆく大きなプロジェクトが開発されたのである。産学が共同で有能な社会人を育成するという新しい教育の形が形成されたといっても過言ではない。聖徳大学の現代ビジネス学科は女子大という特徴を生かして女性が生涯働いて行くことを前提として働くことの必要性と働き続けることの重要性を学科の理念として教育していたことも大きなことといえよう。

現代ビジネス学科は結果としてこの調査の対象となった４７名の学生の就職率が 97.6%（全員が正社員として採用）という数字が出たことで６ヶ月間のインターンシップの成功が証明された。現在、日本の就職事情はかなり厳しくなっているが、正社員と非正社員との格差は広がる一方である。インターンシップ中に職場で働きながら現実に正社員と非正社員のあり方を目の当たりにしていれば、学生は自ずと自分の人生でどのような選択が必要か理解する。

また、学生のアンケートの中でインターンシップを経験して良い点に人に思いやる心ができたとあるが、これは人生を生き抜く上に最も貴重なことを学んだといえる。いずれにしてもインターンシップに行った学生の全員がインターンシップを経験したことが学生時代の最大の収穫と位置づけていることが、長期のインターンシップの将来を明るいものにしているといえよう。

参考資料

日本経済新聞社　「インターンシップを生かそう」2004 年 7 月 17 日夕刊生活欄
文部科学省　http://www.mext.go.jp/
厚生労働省　http://www.mhlw.go.jp/
聖徳大学　http://www.seitoku.ac.jp/